

8. 「セキュリティ」と情報倫理学

少し前は、情報倫理というと、すぐネットワーク上のポルノのことを連想されてしまっていて苦笑いした時期もあったが、昨今ではやはりネットワーク・セキュリティの問題が多くの人々の関心を集めているようだ。今年の4月号では、クラッキング騒動について簡単に論じてみたが、今回もう一度考えてみることにしたい。

『情報倫理学—電子ネットワーク社会のエチカー』(越智、土屋、水谷編、ナカニシヤ出版刊)で越智貢さんも強調しているように、情報倫理学というのはセキュリティ・モラル、すなわち安全性の倫理にとどまるべきものではない。しかし、やはり世間一般の期待はそこに一番あるようだ。たとえば技術系の学会で情報倫理に関心のある先生方の多くはセキュリティ技術の専門家であり、名誉教授クラスの大家がほとんどである。「われわれは技術ですべてを押さえこめると思って長年やってきたが、どうもそうではないらしい。やはり倫理ということが一番重要だと最近になってようやくわかった。倫理学者には大いに期待しています」といった趣旨のことを言われたことが何度あるだろう。面はゆいことこの上ないが、こうした期待に対して、「いや、倫理学というものはもっと深遠なものでして、こうすれば安全性が高まるなどという下世話な話はどうでもいいんです」とはとても言いにくいし、言うべきでもないだろう。しかし正直なところ、少しばかり途方にくれるという感がないわけではない。

倫理というものが明示的な制裁システムをもたないのに対して、それにもとづいて公権力が行使される実定法は、安全性の保持という点では、はるかに実効性は高いともいえる。今年2月に施行された「不正アクセス行為の禁止等に関する法律」は、まさしくインターネット時代を象徴する法律である。しかし、ひねくれものの倫理学者ならば、この法律がまさに画期的である点をつぎのようなどころに見いだすであろう。同法は、「アクセス管理者」に対して防御措置をとることを義務づけているのだが、これは不正アクセスを住居への不法侵入とのアナロジーで考えてみれば奇妙なことである。住居侵入においてはあくまで侵入者が悪いのであって、鍵をかけ忘れた側は、その不注意を指摘されることはあっても(少なくとも日本では)非難されることはない。ということは、不正アクセスは住居侵入とはまったく異なる種類の行為ということになる。

セキュリティの甘さは、クラッカーによるアタックの踏み台になるがゆえに、そのマシンを利用しているユーザのみならず、ネットワーク全体に対する危害を与えることにつながるからだという理由が考えられているのだろうか。自分の身は自分で守るという自己責任原則ではなく、他者への危害につながるというわけである。そうだとすると、施錠していない家に侵入され、その電話や包丁を使って犯罪行為をされたりしても家の持ち主が責任を問われることはないはずである。可能なアナロジーがあるとすれば、銃砲刀剣類のように免許をもった所持者に管理責任が義務づけられている物をずさんな管理をしていた場合であろう。そうすると、ネットワーク接続されたマシンは、管理者に注意義務を課すことのできる特殊なものとして考えられていることになる。今回の立法では見送られたが、アクセスログの保存義務という発想も、こうした観点から考えられているに違いない。だが、テレビやゲーム機がインターネット接続され、固定IPアドレスによる常時接続が当り前のことになると喧伝される一方で、私たちはコ

ンピュータというものをほんとうに猟銃のごときものとして考えねばならないのだろうか。さらにはまた、電子ネットワーク社会に暮らすということは、全員が施錠責任を問われるひとつの共同住宅に住むようなものなのだろうか。情報倫理学としては、ありうべき情報化社会のデザインということを遠望しつつ、そのような問いを出し続けなければなるまい。はっきり言うなら、昨今のセキュリティ不安神経症候群とでもいうべき状態は、現状ではいたしかたのないこととはいえ、異常である。

セキュリティ業者たちが警告するのは、防御措置義務がある以上、踏み台に使われ たならば、たとえ刑事罰が設定されていなくとも民事で訴えられたり、警察に証拠保全でサーバマシンを押収されたりする危険性である。要するに、不注意から他人に迷惑をかけたという理由で自分に被害が及ぶことがあるので気をつけましょうということだ。海外の裁判所から突然損害賠償の命令がくるかもしれないと脅す業者もいる。金の力でセキュリティを守るとするのが常態になる時代が来ているのかもしれない。潜在的マーケットは普通の警備保障会社以上のものがあるだろう。最近寄稿を求められたセキュリティ関係の月刊業界誌は、企業の経営者を購読層としているらしく、全 100 ページ上質紙フルカラー印刷のそれは、なんと一部 5000 円もする。執筆者は、学者から技術者、官僚、警察官、軍事評論家 (!) にまでおよぶそうそうたる顔ぶれである。それに倫理学者がつけ加えられることになるのだが、いったい何が期待されているのだろう。またしても途方にくれることになる。

(2001 年 1 月号)